

授与機関名 順天堂大学

学位記番号 甲第 1851 号

Correlation between the *Bayley Scales of Infant and Toddler Development, Third Edition*, and subsequent developmental status at age 6 years in very low birthweight children

(極低出生体重児におけるベイリー乳幼児発達検査法第 3 版を用いた発達評価と 6 歳時の認知発達との相関)

三友 聡美 (みとも さとみ)

博士 (医学)

論文内容の要旨

早産・低出生体重児において、発達障害の早期発見は重要な課題である。今回、我々は極低出生体重 (VLBW) 児において 3 歳に行ったベイリー乳幼児発達検査第 3 版 (BSID-III) と、6 歳の認知発達との関連から BSID-III の有用性を検討した。

BSID-III の平均合成得点は認知 98.3、言語 93.2 (平均尺度得点は受容言語 9.4、表出言語 8.2) であり、カウフマン心理教育アセスメントバッテリー (K-ABC) の平均標準得点は認知処理 94.2、継次処理 94.8、同時処理 94.0 だった。BSID-III の合成得点と K-ABC の標準得点はそれぞれ有意な正の相関がみられた。また下位尺度間の比較においては、BSID-III の認知、受容言語、表出言語はそれぞれ K-ABC の絵の統合、語の配列、位置探しと正の相関を認めた。

以上の結果より、3 歳時 BSID-III は 6 歳時の全般的認知機能と相関し、さらに下位検査間の比較からは、BSID-III の認知、受容言語、表出言語尺度はのちの空間認知、知覚統合、ワーキングメモリーを測る課題と相関することが明らかとなった。極低出生体重児の認知発達特性や学習障害のリスクを予測するうえで、BSID-III の認知および言語尺度は有用である可能性が示唆された。